

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主論文の要旨

論文題目 日本語と中国語のアスペクト形式に見られる諸制約  
—事象投射理論・形式が持つ機能領域の観点から—

氏名 山田 祐也

## 論文内容の要旨

本研究は、日本語と中国語のアスペクト形式に見られる諸制約（特徴）を例に挙げながら、従来の議論・観点では十分な説明を行うことができなかった制約に対して、「事象投射理論」（岩本 2008, 2010, 2011, 2015, 2021 など）、「比較類型論」（comparative typology）（Hawkins 1986; 堀江 2001; 堀江・プラシャント 2009; 堀江他 2021 など）、「認識内 / 外の情報（epistemicity）」（Shinzato 1991）の分析枠組み及び観点を援用して議論を行った。本研究は七つの章からなる。

まず、第 1 章では、本研究に関わる先行研究の背景を概観し、本研究の研究目的及び本研究の構成について述べた。

第 2 章では、第 1 章で簡潔に言及した先行研究の議論を確認しながら、具体的な問題点や分析枠組みを示した。まず、「継続」vs.「瞬間」、「動き」vs.「変化」の観点から「ている」機能を議論する研究と森山（1988）、中村（2001）の分析について確認し、従来の観点・分析枠組みでは、本研究の研究目的の一つである段階複合動詞（「V-始める」「V-続ける」「V-終わる」「V-終わる」）の諸特徴及び「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりに対する議論を十分に行えないことを指摘した。その後、従来の観点とは異なる、事象投射構造（概念構造）と関数の適用制約によって「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりを議論するアプローチを取っている事象投射理論（岩本 2008 など）について確認し、本研究への援用可能性を示した。さらに、事象投射理論を通言語的議論に援用した研究（林 2012; 岩本 2015）を確認し、林（2012）、岩本（2015）による「存現文」を論拠とした「中国語の設置動詞は「維持」を表す概念構造を有していない」という主張に対して、中国語の設置動詞における「維持」の概念構造の有無は、「着」との関わり（存現文）以外の観点から検証する必要があることを指摘した。第 2 章の最後では、「パーフェクト」を表すとされてきた「た」に見られる制約、「た」に否定形式の「ていない」が対応する要因について、「た」と“*hayssta*”との対照によって見出された「動的叙述性」という観点から議論を行っている井上（2001, 2011）の研究を確認した。そして、「た（なかった）」に見られる諸制約を慎重に検討す

ると、「動的叙述性」という観点では十分な説明を行えないことを指摘した。

第3章では、まず、一貫性という点で問題が見られた岩本(2008)による情報の空虚化に関する議論について、「強制による逆関数の連続適用と情報の空虚化に関する修正提案」を示した。さらに、「解釈規則(強制)による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」の捉え直しを行い議論の再検討と精緻化を行った。その後、現行の事象投射理論(岩本2008)では明らかにされていなかった稼働期間修飾句の概念構造(関数)とその適用プロセスを提案した。本研究は、稼働期間修飾句の概念構造においても、単純期間修飾句と同様に限界化関数(COMP)が含まれていることを提案した。そして、単純期間修飾句と稼働期間修飾句のCOMPは、修飾期間の計算に利用する終局点の時間情報を下位分類(タイプA vs. タイプB)することによって区別した。さらに、事象投射構造に元々存在する情報が、後続して適用される期間修飾句(COMP)の計算に必要な情報である場合、強制に伴い「情報の受け継ぎ」が起こり、逆関数同士を連続適用しても空虚な構造(情報)が生まれなくなるプロセスを提案した。第3章では、本研究の提案が、岩本(2008など)で提示されている用例等を分析する際にも必要になることを示し、アドホック的なものではなく、事象投射理論(岩本2008など)による議論の一貫性という観点からも妥当なものであることを示した。また、第3章における本研究の一連の提案によって、事象投射理論において、限界的事象への稼働期間修飾句の適用を議論できるようになっただけでなく、従来の岩本(2008)の議論に見られた問題点も克服することができたと考えられる。

第4章では、段階複合動詞(「V-始める」「V-続ける」「V-終わる」「V-終わる」)の諸特徴及び「ている」機能、副詞(「様態副詞」「期間修飾句」)の関わりについて事象投射理論(岩本2008など)の枠組みによって議論を行った。まず、同様に主語の動作を表し、「過程」を含意していると考えられる「V-終わる」「V-終わる」に「ている」を付加した場合、異なる機能が成立する要因に対して、「V-終わる」は「包括的順序部分関係」、「V-終わる」は「包括的終端同時重複部分関係」という異なるタイプの拡大事象投射構造を成していることを提案した。そして、「ている」(CRS)の適用においても、「相変換関数分配の原則」によって異なる制約が課されるため、「V-終わる」「V-終わる」に「ている」を付加した場合、異なる機能を成立させると論じた。次に、「過程」を含意しており「ている」を付加した際にも「進行中」を成立させると考えられる「V-始める」に期間修飾句を付加して過程期間を表せない要因について、本研究は「V-始める」の(拡大)事象投射構造は「始局点」と「具体的に規定することができない終局点」の情報によって限界づけられていることを提案した。そして、期間修飾句の関数COMPを適用した場合、第3章で再検討と精緻化を行った「強制による逆関数の連続適用と情報の空虚化に関する修正提案」「解釈規則(強制)による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則(本研究の提案版)」の観点から不適格な構造が作り出される。そのため、期間修飾句は「V-始める」の過程期間を修飾できないと論じた。最後に、「V-始める」「V-終わる」「V-終わる」と異なり「V-続ける」が「維持」を表すことができる特徴について、「V-始める」「V-終わる」「V-終わる」の拡大事象投射構造では限界的な事象が補文として組み込まれる場合、終局点によって限界づけられている必要がある。一方、「V-続ける」の拡大事象投射構造では、限界的な事象が補文として組み込まれる場合、始局点と終局点のいずれによって限界づけられていてもよいことを提案した。この

ことから、「V-続ける」においては、終局点によって限界づけられている「使役変化動作」だけでなく、始局点によって限界づけられている「客体変化維持」の事象投射構造も補文として組み込むことができることを論じた。第4章では、従来の観点・分析枠組みでは十分な説明を行えなかった課題に対して、事象投射理論の分析枠組み（第3章で本研究が精緻化・提案を行ったものを含む）を援用することによって、一定のまとまりのある議論・説明を行えることを示した。

第5章では、事象投射理論を援用した通言語的研究（林 2012; 岩本 2015）によってなされてきた「中国語の設置動詞は「維持」を表す概念構造を有していない」という主張に対して、「(i)「維持」に対する禁止命令表現が成立する」「(ii) 属性叙述化した場合「着」が「維持」を表す」「(iii)「維持の続行」が表される」「(iv)「維持の中止」が表される」という四つの論点から、中国語の設置動詞も「維持」を表す事象概念構造を有することを明らかにした。そして、「着」を設置動詞に付加して客体変化後の局面を表す際、一般的に自動詞的構文が成立するのは、林（2012）、岩本（2015）が主張する「語彙化パターンの違い」によるものではなく、中国語のアスペクト形式である「着」の制約によるものだけであることを、形式と意味の対応関係の密接性という比較類型論（Hawkins 1986; 堀江 2001 など）の観点を援用して主張した。第5章の議論において、本研究は岩本（2015）、林（2012）とは異なる立場を取るものの、事象投射理論で提案されている観点を援用することによって、「語彙的維持」と「語用論的維持」という新たな概念を示すことができた。さらに、「事象投射理論」と「比較類型論」の観点を融合的に援用することで、日本語と中国語の間に存在する形式と意味の対応関係における傾向の違いに関する議論を行うことができた。

第6章では、「パーフェクト」を表すとされてきた「た」に見られる特徴で、従来の研究（井上 2001, 2011 など）が指摘している点以外に、「時の経過」による「た」の使用可能性の変化という特徴を指摘した（【問題点 I】）。さらに、「なかった」の使用制約によって作り出される「(もう) た」と「ていない」の対応関係についても、発話者の認識的側面が影響を与えていることを指摘した（【問題点 II】）。そして【問題点 I・II】については、「た」と“*hayssta*”との対照によって見出された「動的叙述性」（井上 2011）という観点では説明することが困難であることを主張した。本研究は、「形式」と「認識内 / 外の情報」（epistemicity: Shinzato 1991）の関わり（対応関係）の観点から「た（なかった）」に見られる特徴を分析することで、【問題点 I・II】を説明できることを論じた。

第7章では本研究の総括を行い、今後の展望を述べた。